

支那史略附錄
笠間益三編輯
中根淑閱
卷四

特31
686



003100-001-1

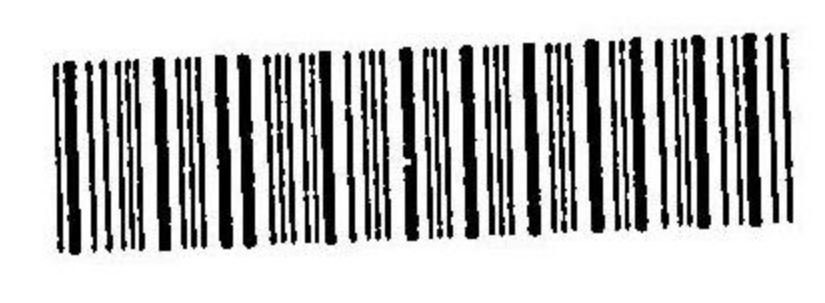
特31-686

支那史略 卷之3, 附錄

笠間 益三/編

M12

ACC-1118



中根 淑 閱
笠間益三編輯

支那史略

附錄

版權免許 鳳鳴閣藏版

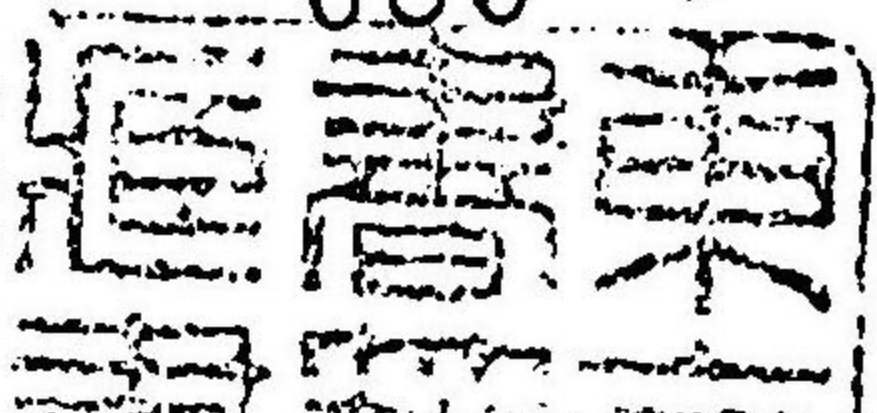


支那史略附錄

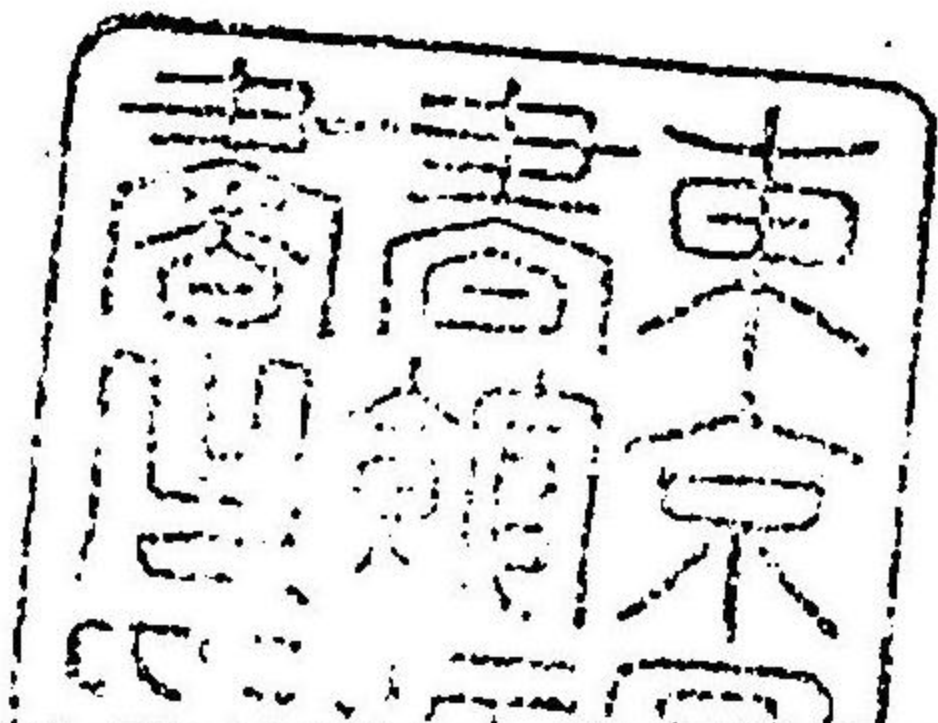
朝鮮史略
三韓紀

中根 淑 閱
笠間益三編輯

特31
686

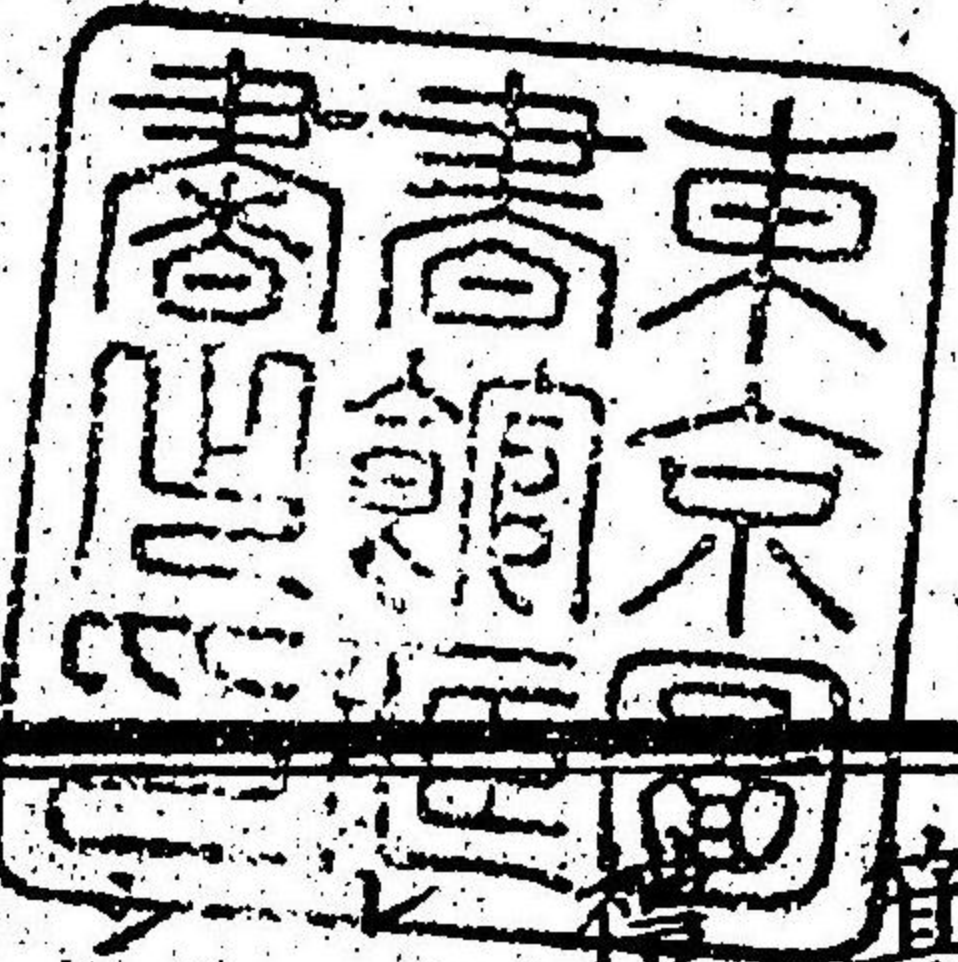


朝鮮ハ鴻荒ノ世知ルヘカラス、國ヲ開ラキシ者
ヲ檀君ト曰フ、此時國ヲ朝鮮ト號ス、平壤ニ都シ、
後白嶽ニ徙ル、世ヲ傳フル千餘年、周ノ武王ノ時、
箕子ヲ此ニ封ス、都ヲ平壤ニ定メ、民ニ教フルニ
禮義ヲ以テシ、農桑ノ業ヲ習ハシ、教化大ニ行ハ
シ、風俗敦厚ニ歸セリ、世ヲ傳フルコト四十一ニ
テ、箕準ニ至ル、此時燕人衛滿ト云フ者アリ、遁



特31

686



支那史畧附録

朝鮮史畧

三韓紀

朝鮮ハ鴻荒ノ世知ルヘカラス、國ヲ開ラキシ者

ヲ檀君ト曰フ、此時國ヲ朝鮮ト號ス、平壤ニ都シ、

後白嶽ニ徙ル、世ヲ傳フル千餘年、周ノ武王ノ時、

箕子ヲ此ニ封ス、都ヲ平壤ニ定メ、民ニ教フルニ

禮義ヲ以テシ、農桑ノ業ヲ習ハシ、教化大ニ行ハ

ス、風俗敦厚ニ歸セリ、世ヲ傳フルコト四十一ニ

テ、箕準ニ至ル、此時燕人衛滿ト云フ者アリ、遁

中根 淑 閱

笠間益三編輯

支那史畧附録

朝鮮史畧

三韓紀

朝鮮史畧

レテ朝鮮ニ入り、箕準ヲ逐フ、準韓ノ地ニ走ル、滿
因リテ悉ク其地ヲ有ツ、孫衛右渠ニ至リ、漢ノ武
帝兵ヲ遣ハシテ之ヲ滅シ、其地ヲ以テ郡ト為ス、
初メ箕準ノ南ニ奔ルヤ、韓ノ金馬渚ニ居ル、是ヲ
馬韓ト曰フ、別ニ辰韓并韓アリ、漢ノ宣帝ノ時ニ
及ヒテ、新羅ノ朴氏、慶州ニ都シ、百濟ノ扶餘氏、扶
餘ニ都シ、高麗ノ高氏、平壤ニ都ス、高氏ハ扶餘ノ
別種ナリ、朱蒙ト云フ者、始メテ國ヲ建テ、高句驪
ト號ス、高ヲ以テ氏トス、其孫莫來ニ至リ、遂ニ扶
餘ヲ并ス、朱蒙ノ後十世ヲ延優ト曰フ、時ニ我カ

仲哀帝ノ五年ナリ、其九年神功皇后西征ス、而シ
テ三韓降伏セリ、延優死シテ、優位居立ツ、其後十
世ニ傳ヘテ、巨璉ト云者アリ、我カ反正允恭兩帝
ノ時ニ當レリ、東晉ノ義熙中ニ至リ、巨璉ノ七世
ノ孫ヲ大興ト曰フ、初メテ李唐ニ入朝ス、天智帝
ノ二年ニ當リ、新羅師ヲ唐ニ乞フテ、百濟ヲ伐チ、
戰フテ大ニ之ヲ破リ、遂ニ之ヲ滅セリ、其五年ニ
當リ、高麗國內紛亂ス、新羅之ニ乘シテ復唐ノ兵
ヲ導キテ之ヲ伐ツ、高麗内憂外患并ヒ起リ、之ヲ
防クヲ能ハス、高氏遂ニ亡フ、唐ノ武后ノ時ニ至

リ、高氏ノ後胤弓裔ヲ求メテ、之ヲ遼東都督朝鮮
郡王トス、後新羅王、唐ニ通シ、高麗百濟ヲ併セテ
之ヲ合同セリ、唐ノ昭宗ノ時、新羅ノ庶族、反シテ
鐵原ニ據リ、國號ヲ泰封ト稱ス、後弓裔暴橫、淫縱
ナルヲ以テ、國人皆離叛シ、其部下ノ將王建ヲ推
シテ君トス、王建立ツ、時ニ我カ醍醐帝ノ延長八
年ナリ、王建ノ時ニ當リ、國勢頗ル振フ、遂ニ兵ヲ
起シテ新羅ヲ伐ツ、新羅防キ戰フ、遂ニ抗スルコ
ト能ハスシテ、降ヲ乞フ、是ニ於テ疆土ヲ廣ムル
コト東南六千里ニ至レリ、始メテ封ヲ建テ、高

麗國王トナル、而シテ新羅ヲ以テ東州樂浪府ト
シ、東京ト稱シ、百濟ヲ金州トシ、金馬郡トシ、南京
ト稱ス、平壤ヲ鎮州トシ、西京ト號ス、凡ソ三京四
府八牧郡四十二州一十八縣三百九十鎮トス、其
臣屬中、柳崔金李ノ四姓ヲ以テ最モ貴族トス、我
カ天慶年間ニ當リテ王建死シ、子武嗣ク、武死シ
テ子昭嗣ク、昭死シテ子伯嗣ク、伯死シテ子ナシ、
弟治嗣ク、治死シテ弟誦嗣ク、誦死シテ弟詢嗣ク、
詢死シテ孫徽嗣ク、是ヲ顯宗トス、徽死シテ子運
嗣ク、運死シテ弟熙嗣ク、熙死シテ子侯嗣ク、侯死

シテ子楷嗣ク、是時趙宗ノ季世ニ當レリ、王楷始
メ金ニ屬シ、後又元ニ通ス、初メ王建ヨリ十數世
ヲ歷テ、忠獻王暉ニ至ル、暉後名ヲ植ト改ム、凡ソ
三百餘年、一姓連綿絶エス、是ニ至リテ元ニ降ル、
是時ニ當リテ、元ノ世祖忽必烈、我カ日本ヲ撃ツ
ノ志アリ、高麗ニ由リ、其重臣ヲ得テ之ヲ導送セ
シメントス、後我カ弘安四年ニ至リ、元主范文虎
ヲ將トシ、大ニ兵ヲ發シテ我ニ寇ス、我カ兵撃チ
テ之ヲ殲ス、時ニ高麗ノ兵、元ニ屬スル者、七千餘
人ヲ亡ヘリ、我カ文永十年、王植ノ權臣ニ林行ト

云フ者アリ、植ヲ廢シテ其弟安慶公滔ヲ立テン
トス、元主兵ヲ遣ハシ、行ヲ伐チ、植ヲシテ復位セ
シム、明年ニ至リテ植死ス、忠敬王ト謚ス、子愷嗣
ク、後名ヲ睿ト改ム、我カ弘安七年ニ至リテ老ス、
子章嗣テ立ツ、我カ徳治元年、睿死ス、忠烈王ト謚
ス、章ノ子顓嗣テ立ツ、是ヲ恭愍王トス、顓放蕩淫
褻ニシテ、大ニ國人ノ心ヲ失フ、初メ王顓我カ日
本人民ノ侵掠ヲ患ヒ、使ヲ遣ハシテ我ニ之ヲ禁
止センコトヲ請フ、我カ正平二十三年ニ至リ、我
ヨリ使者ヲ發シテ之ニ報ス、是歲明ノ太祖朱元

璋國ヲ建ツ、王顓上表シテ臣ト稱ス、明王顓ヲ封
シテ高麗王トス、車服日曆皆明ノ制度ニ從フ、我
カ文中年間、我カ人民其龜山縣等ヲ侵掠シ、是ヨ
リ諸地方ニ及ヘリ、是ニ於テ數百里ノ間騷然、民
皆荷擔シテ立ツ、京城之カ為メニ震懼ス、我カ天
授元年、王顓無道ナリ、國相李仁任之ヲ弑シ、子禍
ヲ立ツ、實ハ王氏ノ血屬ニ非サルナリ、是歲我カ
人民復其瀕海ノ地ヲ侵掠スルコト益甚シ、明年
ニ至リテ稍ク止ム、時ニ慶復興李仁任等黨ヲ樹
テ、國中騷擾ス、是時ニ當リ、我カ人民ノ彼ノ邊疆

ヲ侵ス者、稍ク止ムヲ以テ羅興孀ト云フ者ヲ使
トシ、我カ邦ニ至ル、我カ邦僧良柔ヲ遣ハシテ之
ニ報シ、土宜ノ物ヲ贈レリ、辛巳ノ歲ヨリ交ヲ絶
ツコト百餘年、此ニ至リテ和始メテ成ル、良柔ハ
故ト晉州ノ僧ニシテ、往歲我カ邦ニ歸化スル者
ナリ、故ニ彼レノ事情ヲ審ニスルヲ以テ、之ヲ遣
ハスト云フ、王禰京城ノ海隣ニ邊シテ、兵禍ノ測
ラレサルヲ以テ、城ヲ内地ニ徙サント欲シ、耆老
ヲ會シテ之ヲ諮ル、遂ニ議ヲ決ス、時夏月ニ會ス、
今ニシテ民ヲ役スル時ハ、農桑ヲ害スルヲ以テ

諫ムル者アリ、乃チ止ム。此時ニ當リ、我カ邊民復入寇シテ絶エス、九州探題今川了俊僧信弘ナル者ニ命シテ、兵ヲ督シテ海賊ヲ捕ヘシム。時ニ我カ天授四年ナリ、明年ノ春、我カ邊民順天等ヲ侵シ、攻メテ諸郡縣ヲ陷ル。遂ニ諸方ニ蔓延シ、殺虐暴掠、勢燄甚熾シナリ。三道沿海ノ地、蕭然トシテ人烟ナシ。此ヨリ我カ元中元年ニ至ルマテ、其禍止ム時ナシ。時ニ王禍酒ニ耽リ、色ニ溺レ、政苛虐ヲ主トス、國人皆服セス。之ヲ諫ムル者アレハ、誅戮ス、禍自ラ諫官某々ノ名ヲ書シ、以テ藏シテ曰

ク、此輩以テ日本ヲ防カシムベシト、諫官皆病ヲ謝シテ退キ去ル。其五年王禍將ニ遼ヲ攻メシトス、出テ、鳳州ニ次ス、獨リ崔瑩ト謀リ、未タ之ヲ公言セス。是日瑩及ヒ李成珪ヲ召シ、遼ヲ攻ムルノ意ヲ告ク、成珪之ヲ諫ムルニ四ノ不可ヲ以テス、禍之ヲ然リトス。李成珪英邁ニシテ謀畧アリ、文武ニ通ス、王禍ノ昏虐ヲ視テ竊ニ廢立ノ意アリ、遂ニ禍ヲ放チテ其子昌ヲ立ツ。是ヲ恭讓王トス。時ニ我カ元中五年ナリ、王昌猶幼ナリ、事ヲ視ルコト能ハス、成珪權威隆赫、國人之ニ畏服ス、鄭

得厚ト云フ者アリ、前王禍ヲ訪フ、禍忿恚シテ曰ク、吾カ放逐ニ遭フハ、則チ李成珪カ為ル所ナリ、卿吾カ為ヌニ之ヲ圖レト、劍ヲ賜フテ之ニ託ス、且ツ曰ク、郭忠輔ト共ニ之ヲ謀レト、得厚乃チ以テ忠輔ニ視ス、忠輔固ヨリ心ヲ成珪ニ傾ク、乃チ伴リ諾シ、以テ成珪ニ告ク、成珪聞キテ驚キ、衆ヲ顧ミテ曰ク、辛耦辛昌ハ王氏ノ胤ニ非ス、吾豈之カ屈辱ヲ受ケンヤト、禍及ヒ昌ヲ江華島ニ徙ス、幾クモナクシテ之ヲ殺シ、而シテ王建二十七世ノ孫瑤ヲ迎ヘテ、之ヲ立ツ、瑤昏迷庸愚ナリ、國勢

衰頽シ、人心離乖ス、群臣議シテ以為ラク、以テ君ト為スヘカラスト、遂ニ之ヲ景州ニ徙ス、是ニ於テ李成珪遂ニ自立シテ國王トナル、時ニ我カ元中九年ナリ、是ヲ今ノ朝鮮王ノ祖トス、

朝鮮紀

李成珪名ヲ旦ト改メ、都ヲ漢城ニ徙シテ之ニ居ル、國ヲ朝鮮ト號ス、旦老ス、是ヲ康獻大王トス、子芳遠嗣ク、我カ應永二十二年、更ニ子禔ヲ立テ世子トス、尋キテ老ス、禔立ツ、其二十九年、足利氏ト書ヲ以テ往復シ、好意ヲ通ス、幾クモナクシテ禔

死ス、子珣立ツ、三年ニシテ死ス、子弘暉立ツ、稚ニシテ孱ナリ、故ヲ以テ位ヲ其叔、孫ニ遜ル、我カ應仁二年ニ至リ、孫死ス、子暉立ツ、六年ニシテ暉死ス、子ナシ、從子藝立ツ、我カ明應四年、藝死ス、子嶷立ツ、風疾ヲ患フ、位ヲ弟懌ニ遜ル、我カ天文七年、大内義隆佛經及ヒ漏刻ノ器ヲ求ム、其十一年、足利義晴書ヲ贈ル、書辭頗ル恭シ、十三年、懌死ス、嶷嗣ク、未タ年ヲ踰エスシテ死ス、子垣立ツ、我カ永祿元年、垣死ス、從子昭立ツ、昭在位日久シ、頗ル政務ニ怠リ、稍々驕奢ヲ極ム、佞邪ノ臣、柳承寵、李徳

馨等アリテ、國政ヲ專ハラニス、我カ天正十四年、豐臣秀吉、明主朱翊鉤、政ヲ失ヒ、武備具ハラサルヲ聞キ、之ヲ窺ハニ、コトヲ思ヒ、先ツ、檣廣康ヲ朝鮮ニ遣ハシ、朝貢ヲ徵ス、廣康要領ヲ得スシテ、歸ル、秀吉其朝鮮ノ事ヲ諳ニスルヲ以テ、私ヲ挾ムヲ疑ヒ、遂ニ之ヲ殺ス、復對馬ノ主宗義智ヲ以テ、使ニ充テ、僧玄蘇ト俱ニ往カシム、王李昭乃チ其大臣黃允吉、金誠一ヲシテ、隨フテ至ラシメ、書ヲ秀吉ニ贈ル、略ニ曰ク、春候和煦、動靜佳勝ナラン、遠ク大王ノ六十餘州ヲ一統スルヲ傳フ、速ニ信

ヲ講シ、睦ヲ修ヌ、以テ隣好ヲ敦クセント欲スト
雖、道路湮晦ニシテ、使臣ノ行李淹滯ノ憂アラシ
コトヲ恐ル、是ヲ以テ多年思フテ復止ム、今貴价
ト與ニ黃允吉、金誠一許箴之、ノ三使ヲ遣ハシ、以
テ賀ヲ致ス、今ヨリ以往、隣好ヲ修ムルコト、他ノ
上ニ出テハ幸甚ナリ、仍リテ不腆ノ土宜ヲ呈ス、
録シテ別幅ニアリ云々、秀吉乃チ答書ヲ作り、以
テ金誠一等ニ與フ、其略ニ曰ク、日本ノ豊臣秀吉、
謹ニテ朝鮮國王足下ニ答フ、我カ邦久ク分離ニ
屬シ、王綱振ハス、秀吉憤激、堅ヲ被リ、銳ヲ執リ、東

西ニ征討シテ、六十餘國ヲ定ムルヲ得タリ、今海
内己ニ治リ、京城威ナル、前古比ナシ、吾道ヲ貴
邦ニ假リテ、明ニ入ラント欲ス、吾明ニ入ルノ日、
以テ我カ為メニ前導タレト、平調信僧玄蘇ヲ遣
ハシ、俱ニ往カシム、王貽書ヲ得テ疑懼ス、誠一以
テ虚喝トス、王貽之ヲシテ二人ヲ饗セシメ、其情
ヲ探ラシム、問答依違決セス、玄蘇聲ヲ勵マシテ
曰ク、議論兩端ヲ得ス、和ヲ欲セサレハ、乃チ戰ア
ルノミト、因リテ辞シ去ル、朝鮮始メテ懼レ、稍ク
邊防ヲ修ム、我カ文祿元年、秀吉ノ兵大ニ至ル、先

鋒小西行長先ツ金山ニ達ス、守將鄭撥出テ獵リ
ス、警ヲ聞キ馳セ還リ、城ニ據リテ防禦ス、終ニ行
長ノ抜ク所ト為リ、生擒セラレ、行長慶尚道ニ入
リ、西生浦多大浦等ヲ陷ル、多大ノ守將尹興信戰
死ス、進ニテ東萊ヲ抜ク、守將宋象賢之ニ死ス、巡
察使金晬東萊ノ急ヲ聞キ來リ救フ、及ハス、行長
進ニテ梁山ヨリ金海ニ向フ、諸郡縣風ヲ望ミ、避
易シテ走ル、而シテ我カ將加藤清正及ヒ其他ノ
諸將皆金山ニ至リ、道ヲ分チテ漢城ニ向フ、諸道
警ヌ國都ニ報ス、王昭命シテ李鎰申砮ヲ以テ大

將トシ、金誠一及ヒ金玃ヲシテ慶尚左右二道ヲ
拒カシム、行長轉戦シテ進ム、李鎰ヲ尚州ノ城北
ニ撃チ、之ヲ走ラセ、申砮ヲ丹月驛ノ彈琴臺下ニ
撃チテ之ヲ斬ル、遂ニ清正及ヒ諸將ト俱ニ王城
ヲ取ル、諸將ノ未タ王城ニ至ラサルヤ、朝鮮己ニ
李鎰ノ敗聞ヲ得テ大ニ怖ル、而シテ猶望ヲ申砮
ニ属ス、既ニシテ騎アリ、馳セテ都門ニ入ル、民迎
ヘテ狀ヲ問フ、對ヘテ曰ク、申總兵死セリ、日本ノ
兵將ニ大ニ至ラントス、都城大ニ擾ル、王昭世子
ト俱ニ夜平壤ニ走リ、急ヲ明ニ告ク、王子ヲ遣ハ

シテ兵ヲ諸道ニ徵ス、是ニ至リテ我諸將王城ヲ
取り、元帥浮田秀家之ニ居ル、諸將道ヲ分チテ進
取ヲ圖ル、六月王昭元帥金命元等ヲ留メ、平壤ヲ
守ラシメ、自ラ寧邊ニ走り、遂ニ義州ニ走ル、右相
柳成龍ヲシテ、兵ヲ發シテ命元ニ益シ、固守シテ
以テ明ノ援ヲ俟タシム、既ニシテ行長ノ攻ムル
所トナリ、命元等城ヲ棄テ、走ル、行長平壤ニ據
ル、是ニ於テ國都平壤ノ間、皆我カ諸將ノ據守ス
ル所トナレリ、水軍ノ節度使李舜臣、兵艦數千ヲ
以テ、巨濟洋ニアリ、我カ水軍諸將與ニ戰フテ互

ニ勝敗アリ、舜臣因リテ閑山島ニ屯シテ以テ拒
ク、我カ水軍進ムコト能ハス、是ノ時ニ當リ、明主
翊鈞大臣ト議シテ、將ニ援兵ヲ出サントス、乃チ
其將祖承訓等ヲ遣ハシ、將ニ朝鮮ヲ援ハントシ、
書ヲ琉球及ヒ暹羅ニ下シ、日本ヲ侵スノ状ヲ為
シ、以テ秀吉ノ航海ヲ羈縻セシム、祖承訓等既ニ
朝鮮ニ入り、嘉山ニ至リ、問フテ曰ク、平壤ノ和兵
乃チ走ルコトナカラシヤト、曰ク否、祖訓酒ヲ舉
ケテ祝シテ曰ク、天我ヲシテ大功ヲ成サシムト、
進ミテ順安ニ至ル、行長ト安定ニ戰ヒ、大ニ敗レ、

承訓身ヲ挺シテ走ル、時ニ猛將精兵、多ク咸鏡道ニアリ、清正ノ阻ツル所トナリ、來リ救フコト能ハス、清正既ニ咸鏡ニ入り、二王子ノ咸鏡北道ニ遁ル、ヲ聞キ、輕兵ヲ提ケテ之ヲ追フ、北道兵使韓克誠、精騎ヲ以テ、清正ヲ鐵嶺ノ北ニ逆、撃テ、清正ノ破ル所トナリテ擒ニ、就ク、時ニ二王子會寧府ニアリ、清正之ヲ聞キ、行コト五十日ニシテ至ル、府使鞠景仁大ニ懼レ、二王子ヲ拘シテ降ヲ乞フ、清正之ヲ許ス、清正王子及ヒ大臣等ヲ拘シ、之ヲ鏡城ニ護送ス、王哈義州ヨリ、將李贊等ヲ遣

ハシ平壤ヲ攻ムル再ヒ、皆行長ニ破ラル、是ニ於テ益急ヲ明ニ告ク、明既ニ祖承訓ノ敗報ヲ得、舉朝震愕ス、是ヨリ始メテ和議ヲ起スニ至レリ、大司馬石星、越人沈惟敬ト云フ者ヲ薦メテ、之ヲ謀ラシム、惟敬朝鮮ニ入り、往キテ行長ヲ見、辞ヲ卑クシ、和ヲ乞フ、未タ成ラス、明ノ群臣議シテ以爲ラク、惟敬ハ信スヘカラス、今天寒ク馬肥エタリ、宜シク兵ヲ出スベシト、乃チ李如松ヲ以テ大將トシ、六將軍ヲ率ヒテ東シ、日本ノ兵ヲ拒カシム、十一月如松ノ大兵已ニ遼東ニ至ル、時ニ惟敬平

壤ニ至リ、行長ト密ニ和議ヲ定メテ去ル、如松ヲ
路ニ要シテ曰ク、和將ニ成ラントスト、如松、惟敬
ノ言ヲ懼ハス、惟敬ヲ執ヘテ之ヲ斬ラント欲ス、
諫ムル者アリ、舍シテ以テ敵ヲ怠ラスベシト、如
松之ニ従フ、二年正月、如松、裨將ヲシテ順安ニ往
カシメ、人ヲ平壤ニ遣ハシ、以テ和議ノ成ルヲ報
ス、行長喜ヒ、二十人ヲ遣ハシ、順安ニ至ラシム、裨
將伏ヲ設ケ、二十人ヲ撃ツ、二十人、走り歸リテ、行
長ニ告ク、行長大ニ驚ク、既ニシテ如松ノ諸軍、平
壤ニ迫ル、行長拒キ戦フ、衆寡敵セス、夜潛ニ衆ヲ

率ヒテ城ヲ出テ、國都ニ走ル、明軍勝ニ乘シテ、東
ス、進ミテ開城ニ入ル、先鋒查大受、立花宗茂ト礮
石嶺ニ戦フテ、敗走ス、如松乃チ盡ク其軍ヲ引キ
テ至ル、小早川隆景、立花宗茂等、兵ヲ督シテ大ニ
碧蹄館ニ戦フ、聲山嶽ニ震ラ、明兵遂ニ大ニ敗走
ス、臨津ニ溺レテ死スル者數ヲ知ラス、如松敗ニ
懲リ、復沈惟敬ヲシテ和議ヲ謀ラシム、惟敬來リ
テ、行長ニ説キテ曰ク、太閤韓倭ヲ還サハ、三道ヲ
割キ、封シテ以テ王トヤント、行長等不學、封王ノ
故事ヲ諳セス、以為ラク、明ニ王タルノ謂ナリト

以テ秀吉ニ報ス、秀吉乃チ和ヲ許ス、倅スル所ノ
二王子、及ヒ大臣以下ヲ歸ス、明ノ使者謝用梓沈
一貫沈惟敬等往キテ秀吉ヲ肥前ニ見ル、秀吉小
西如安ヲシテ與ニ往カシム、明主如安ヲ疑ヒ、敢
テ入レス、之ヲ遼東ニ置ク、三年是時ニ當リ日本
ノ兵未タ戍ヲ撤セス、王昭屢明ヲ促カシテ、和ヲ
定メシム、此ニ於テ明主如安ヲ召シ見ル、明乃チ
封王ノ議ヲ定ム、正使李宗誠副使楊方亨ヲ遣ハ
シ、沈惟敬ヲ以テ教導トシ、日本ニ赴カシム、四年
時ニ明ノ三使既ニ朝鮮ノ境ニ入り、疑懼シテ敢

テ進マズ、惟敬危言ヲ以テ宗誠ヲ怵レシム、宗誠
遂ニ遁レ去ル、乃チ方亨ヲ以テ正使トシ、惟敬ヲ
以テ副使トス、我カ慶長元年四月、明使及ヒ朝鮮
ノ使將ニ日本ニ赴カントシ、日ヲ刺シテ發ス、九
月日本ニ至リ、秀吉ヲ伏見城ニ見ル、冊文中ニ汝
ヲ封シテ日本國王ト為スノ語アリ、秀吉之ヲ聞
キテ大ニ怒リ、明韓ノ使者ヲ逐フ、惟敬懼レテ遁
レ去ル、秀吉遂ニ令ヲ下シ、再ヒ朝鮮ヲ伐ツ、二年
正月、秀吉ノ將加藤清正機張ニ至ル、直ニ梁山ヲ
攻メテ之ヲ陷ル、小西行長釜山ニ軍ス、王昭李元

翼ヲシテ鳥嶺ヲ守ラシメ、而シテ自ラ海州ニ奔
リ、急ヲ明ニ告ク、明復沈惟敬ヲ宥シテ、往キテ更
ニ和ヲ計ラシム、惟敬既ニ反覆詭詐ナルヲ以テ、
朝鮮亦之ヲ指目スルニ、邪臣ヲ以テス、惟敬大ニ
窘ム、因リテ計ル、行長ハ和ヲ主トシ、清正ハ戰ヲ
主トス、先ツ清正ヲ退クルニ如カスト、書ヲ清正
ニ贈リ、威ヲニ明ノ大兵將ニ至ラントスルヲ以
テス、清正答ヘテ曰ク、明兵ノ來ルハ固ヨリ願フ
所ナリト、惟敬為ル所ヲ知ラズ、遂ニ行長ニ因リ
テ、日本ニ投歸セント欲ス、明ノ將刑玠遼東ニア

リ、之ヲ聞キテ以為ク、彼レ日本ニ入ラハ我ノ害
ナリト、其走路ヲ要シテ之ヲ誅ス、而シテ明ト日
本ト遂ニ絶ツ、明將楊元陳愚忠韓將元鈞等、水陸
相援ケテ以テ全羅ヲ守ル、我カ水軍藤堂高虎加
藤嘉明等、唐島ヲ攻メテ元鈞ヲ破ル、鈞逃レテ巨
濟ニ至ル、行長夜之ヲ襲ヒ、鈞ヲ斬ル、行長清正兵
ヲ分チテ、南海順天及ヒ慶州ヨリ進ミテ、全羅ニ
入ル、諸城戰ハスシテ潰エ走ル、王貽水陸皆敗ル
、ヲ聞キ、李元翼ヲシテ鳥嶺ノ守ヲ攝シテ、徑ニ
忠清ニ出テ以テ日本ノ兵ヲ拒カシメ、李舜臣ヲ

シテ三道ノ水軍ヲ統ヘシム、舜臣我カ將菅正陰
ト錦島ニ戦フテ之ヲ破ル、正陰敗死ス、十月天漸
ク寒シ、清正退キテ蔚山ヲ守リ、行長順天ヲ守ル、
十一月明將刑玠朝鮮ニ入り、大軍ヲ以テ清正ヲ
蔚山ニ圍ム、清正拒キ戦フテ屈セス、既ニシテ毛
利秀元黒田長政等赴キ援フ、蔚山ノ圍解ク、三年
九月、復來リテ蔚山ヲ圍ム、立花宗茂往テ之ヲ救
フ、撃チテ明兵ヲ走ラス、是ヨリ先キ秀吉薨ス、報
至ル、諸將皆兵ヲ引キテ還ル、鄧子龍李舜臣等之
ヲ海中ニ要ス、克タス、舜臣之ニ死ス、日本ノ兵悉

罷メ還ル、六年對馬ノ主宗義智及ヒ柳川調信、徳
川家康ノ命ヲ以テ、前年兵ヲ交ヘシコトハ、則チ豊
臣氏ノ意ニ出ツル所ニシテ、徳川氏ノ知ル所ニ
非サルコトヲ告ケシメ、以テ之ヲ調停ス、時ニ明ノ
援軍猶留アリテ韓地ニアル者自ラ救援ノ功ヲ
負ヒ、驕暴至ラサルナシ、王貽之ヲ憂フ、故ヲ以テ
我ト和スルノ意アリ、乃チ之ニ從フ、七年全繼信
孫文或等ヲ我ニ遣ハス、徳川氏井出智正ヲ遣ハ
シ、繼信等ト俱ニ至ラシム、九年孫文或復來リ、徳
川家康ヲ伏見ニ見ル、家康俘虜男女一千三百口

ヲ歸ス、十二年正月、使臣呂祐吉等至ル、王貽書ヲ
贈リテ曰ク、隣交道アルハ古ヨリ然リ、二百年來
海波揚ラサルハ、天朝ノ賜ニ非サルハナシ、而シ
テ弊邦亦何ソ貴國ニ負カンヤ、壬辰ノ變、故テク
シテ兵ヲ動カシ、禍ヲ構フル極メテ慘、而シテ先
王ノ丘墓ニ及フ、弊邦ノ君臣、痛心切骨、義貴國ト
俱ニ天ヲ戴カス、六七年來、馬島和ヲ以テ請フ為
スト、雖實ニ是弊邦ノ恥ツル所ナリ、承聞スルニ
今ヤ貴國前代ノ非ヲ改メ、舊交ノ道ヲ行フ、苟モ
此ノ如キ時ハ、豈兩國ノ福ニ非スヤ、故ニ使ヲ馳

セテ以テ和好ノ驗トス、不腆ノ土宜具ニ別幅ニ
アリト、十三年貽死ス、穆宗ト謚ス、三子アリ、長ヲ
璋ト曰フ、次ハ璋、璋次ハ璋、璋嗣ク、是ヨリ信書往復
我ト絶エヌ、我カ元和九年三月、王璋死ス、璋ノ子
侖立ツ、我カ寛永四年正月、清人來リ伐ツ、王侖京
城ヲ棄テ、妻子ヲ携ヘテ江華島ニ遁ル、清人侖ノ
弟覺ヲ執ヘテ去ル、尋キテ放テ歸ス、十三年清ノ
太宗自ラ來リ伐ツ、王侖復走リテ、南漢山ヲ保ツ、
清兵江ヲ渡リテ來リ圍ム、明年正月、遂ニ降ル、冬
清廷侖ヲ更メ封シテ、朝鮮國王トス、我カ慶安三

支那史略附録終
年夏、倭死ス、仁祖ト謚ス、次子湊立ッ、我カ萬治二
年夏、湊死ス、孝宗ト謚ス、子搆立ッ、我カ延寶二年
秋、搆死ス、顯宗ト謚ス、子煇立ッ、我カ正徳五年夏、煇死
ス、肅宗ト謚ス、子昫立ッ、尋テ死ス、弟昫立ッ、我カ
寶曆十三年、昫死ス、次子恒立ッ、子孫世々朝鮮國
王タリ、

支那史略附録終

明治十二年三月六日版権免許

定價金八錢

福岡縣士族

編輯人

笠間益三

芝區愛宕下町
四丁目壹番地寄留

東京府平民

出版人

小倉壯太郎

麴町區元園町
二丁目十四番地居住

